

# おん しん びょう どう 「怨親平等」という言葉を知っていますか？

「怨親平等」——もともと仏教の言葉で、敵味方の恩讐を越えて、区別なく同じように極楽往生させることを意味します。「怨親」とは自分を害する者と、自分に味方してくれる者の意味です。これが日本では古来、戦いによる犠牲者を敵味方を問わずすべて平等に供養する意味に使われてきました。中世以降、勝利した武将は敵味方双方の戦死者のために敵味方供養塔を建てる慣わしがあり、

最も大規模なものは、元寇で戦死した敵味方（元と日本）の供養のために執権北条時宗が建立した鎌倉・円覚寺です。その後、南北朝の動乱時や戦国時代、朝鮮の役、そして昭和に入っの日支事変でも、敵味方とも供養する碑が建てられました。

「天声人語」の名付け親である明治時代のジャーナリストにして漢学者としても著名な西村天因は、明治35年、日本赤十字社25周年に当たり、大阪朝日新聞紙上で次のように述べています。「(敵味方分け隔てなくという)赤十字社の精神の如きは、決して西洋の<sup>そごう</sup>叛興(始め興すこと)に非ずして、我邦は古より之を實行し来り(中略)武士道の神髓是なり」。さらに西村は「儒教より智仁勇の三徳を受け、仏教より降魔の利剣と救世の慈航との調和を受けて」、「情を知」り「物の哀を知る」武士による道が「武士道」だと位置づけ、「敵と為り味方と為るも、前世の因縁にして怨あるに非ずと観じ」、その「敵味方の仁慈と云ふ精神」の発露として、南北朝動乱と朝鮮の役における歴史的事例を挙げています。これは中世から現代にまで引き継がれたわが国ならではの尊い思想信仰ではないでしょうか。

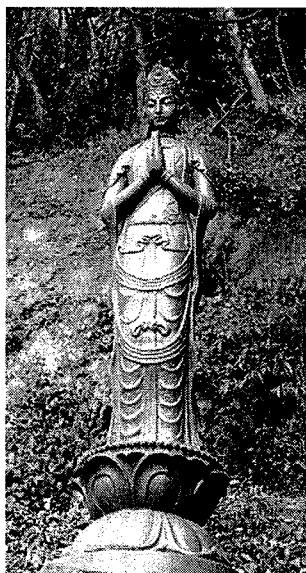
再生日本21では、浅井隆の慰霊の志を形にするため、昨年有志を募って熱海の興亜観音(支那事変における日支双方の犠牲者を「怨親平等」に供養している)の慰霊法要に参列いたしました。今年にはさらにそれを発展させて「怨親平等」のお寺の代表格である鎌倉・円覚寺と熱海・興亜観音を巡ります。

円覚寺では管長・横田南嶺老師の法話「怨親平等」を賜り、興亜観音では慰霊法要に参列し、伊丹妙浄師の法話「無私の祈りは必ず叶う」を賜ります。

この稀有な機会にぜひわが国の誇るべき思想信仰を学び、心を清め整えませんか。



円覚寺山門



興亜観音聖観音像

怨親平等 一興亜觀音慰靈法要法話一

平成二十九年五月十八日 臨濟宗円覺寺派管長 横田南嶺

北条時宗 (1251~1284) 十八才執権

元寇 文永の役 文永十一年(1274年) 時宗二十三才

弘安の役 弘安四年(1281年) 時宗三十才

「四百余州を挙る 十万余騎の敵 国難ここに見る 弘安四年夏の頃 なんぞ怖れんわれに 鎌倉男子あり 正義武断の名一喝して世に示す」

頼山陽「蒙古来」 「相模太郎、胆、甕の如し」

「莫煩惱」元亨釈書卷八。弘安四年の春正月、平帥(北条時宗) 来たり謁す。元、筆を采り書して帥に呈して曰く、「莫煩惱」。帥曰く「莫煩惱とは何事ぞ」元曰く、春夏の間、博多擾騷せん。而れども、一風纔に起こつて万艦掃蕩せん。願わくは公、慮りを為さざれ」。果たして海虜百万鎮西に寇す。風浪俄に來たつて一時に破没す。

「乾坤、孤筇を卓つるに地無し、喜得す人空法亦空なるを。

珍重す大元三尺の劍、電光影裏、春風を斬る」

「此軍及び他軍、戦死と溺水と、萬衆無歸の魂、唯願わくは速かに救拔して、皆苦海を超ゆることを得、法界了に差無く、怨親悉く平等ならんことを」

夢窓国師 「乱に因つて懷を書す」

世途今古幾たびか窮通す。万否千歳一空に帰す。

傀儡棚頭、彼我を論じ、蝸牛角上、英雄を闘わしむ。

須く知るべし、鷓蚌相持する処、終に閻魔の考鞠の中に墮つることを。馬を華山に放つ、何の日をか待たん。如かじ、轡を覚城の東に頓めんには。

打つ人も打たるる人ももろともにただひとときの夢のたわむれ



臨濟宗円覚寺派管長・横田南嶺老師ご揮毫